



キトラ古墳  
の  
発掘調査

2004年7月

独立行政法人 奈良文化財研究所・文化庁



墳丘全景



墓室入り



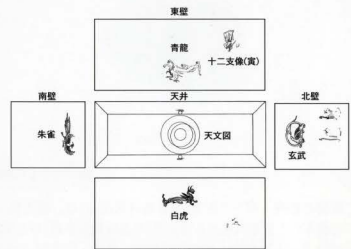
墓室と石室



石室内の遺物堆積状況（奥は漆喰塗の床面）



天井の天文図と日像・月像



石室展開図



十二支像(北)



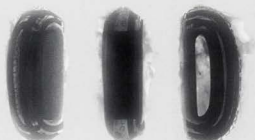
ごうやくくわくし こほくだま  
銅製釘隠と琥珀玉



かんだがなぐ  
棺の鍔座金具 (X線写真・実大)



かんぞうかん どうざうく  
金象嵌のある刀装具



金象嵌のある刀装具 (X線写真・実大)

**調査の経緯** キトラ古墳(明日香村阿部山)は、凝灰岩切石積みぎょうかいがんきりいしづみの石室を内蔵する終末期(飛鳥時代後半期)の古墳。1983年に玄武げんぶの絵、1998年に青龍・白虎・天文図、2001年に朱雀しゅくわくがみつかった(2000年国特別史跡指定)。だが、薄い漆喰しつこくの上に描かれた壁画は各所で破損し、剥落寸前の状態にある。そのため、2002年から文化庁が主体となって保存事業が始まった。石室南側にある墓道(棺や閉塞石の搬入路)を一部調査し、翌年から空調施設完備の保護覆屋を建設。2003年秋以降に準備を進め、2004年1月から7月まで奈文研、奈良県立橿原考古学研究所と明日香村が共同で発掘調査にあたった。

**遺構の概要** 盗掘坑 石室の西側に沿って溝状に掘られていた。上幅約2m、南北長約5mある。盗掘者は閉塞石の西側上部を壊し、上下0.65m・上幅0.4mの孔をあけて侵入していた。

**墓道** 石室前の長さ約1.5m分を調査した。幅2~2.5mあり、石室側が狭い。東西の壁はほぼ垂直にたつ。床面には、閉塞石を搬入したコロのレール痕跡とこれを撤去後に掘られた穴2個(直径約0.6m)がある。穴は墓前祭祀に関係するのだろう。墓道は最終的に版築技法(土を突き固める方法)で埋め戻す。大ききは3層にわかれ、最下層の0.5~0.6mが特に堅くしまる。

**石室** 石室は、総高1.82m・幅1.96mあり、天井石は厚さ0.68m・幅1.85m、閉塞石は高さ1.15m・幅1.2m・厚さ0.495mある。石材の目地(継ぎ目)には漆喰を塗りこむ。

内法は、奥行2.4m・幅1.04m・高さ1.24m。盗掘孔から流れ込んだ土を除去すると、石室一面に黒漆塗り木棺(内面朱塗り)の破片が堆積していた。木棺片と床面との間には薄い泥土層があるので、木棺が盗掘時に砕け、石室内で水没と乾燥を繰り返して再堆積したことがわかる。

**出土遺物** 木棺片多数とともに、金象嵌鉄製刀装具片1、琥珀玉2、金銅製鍔座金具1、銅製釘隠5、人骨片約15、土師器皿1などが出土した。刀装具片は刀を腰に付ける帯を通した金具。人骨は熟年以上の頭蓋骨片と鑑定されたが、性別は不明。

**壁画** 壁画の写真撮影とフォトマップ制作もおこなった。天文図の詳細が判明し、四神のほかには十二支像が描かれていたこともわかった。壁画はいずれも鉛書きで下書きする。天文図の描き方とともに高松塚古墳とは違いがある。

**まとめ** キトラ古墳の発掘調査は大きな成果をあげ、無事に終了した。しかし、石室内の堆積土はまだ未洗浄。また、壁画の保存修復はこれからが本番。調査はまだ終わらない。